第９回　ピースボート日韓クルーズ

PEACE & GREEN BOAT 2016

PEACE&GREEN BOATがめざすもの

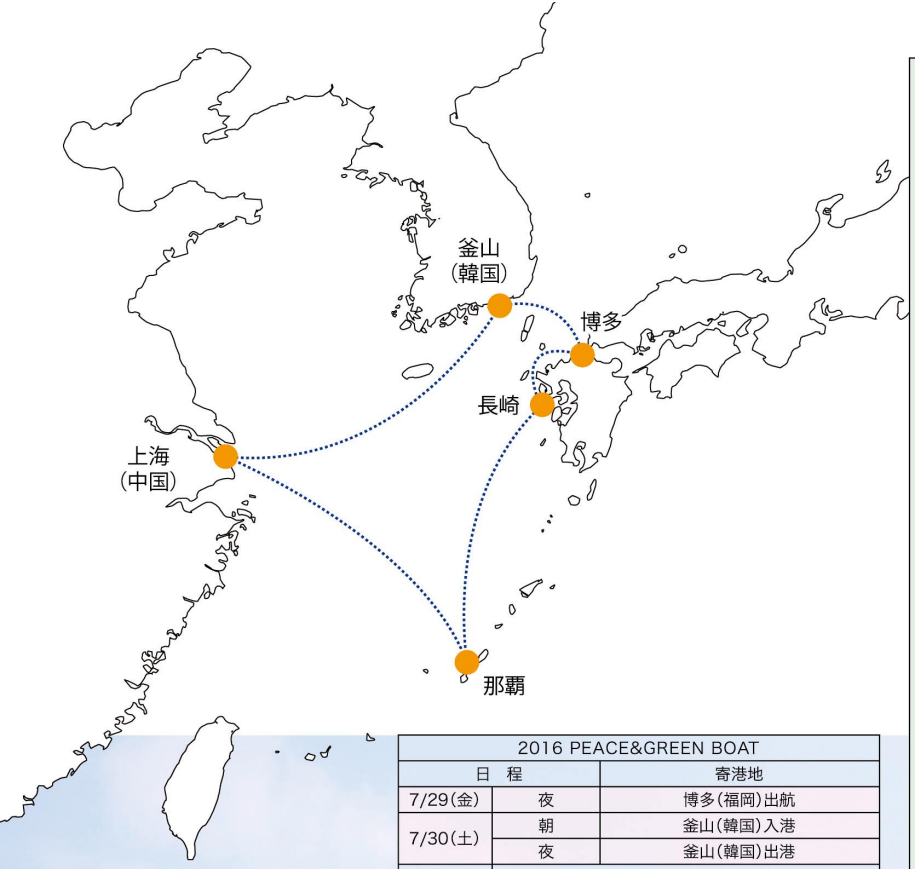
2016年を振り返り「内向き」になりつつある世界を越えて――

欧米を含め「先進国」と呼ばれている国々が「内向き」になっています。国民投票で英国がEU離脱を決定したことや米大統領選において移民排斥を公約として堂々と唱えるトランプ氏が米国の大統領になったことなどはその一例です。国際協調より自国民優先という「内向き」志向は難民をこれ以上受け入れることはできないとする他のヨーロッパ諸国でも見られます。日本と韓国は、米国との同盟関係を最優先し、自国民にさえ犠牲を強いています。そして、自国の過去の過ちを美化し、異質なものに排他的な点において、安倍政権下の日本も朴槿恵政権下の韓国も内向きであることに変わりはありません。韓国の市民は朴槿恵政権打倒に立ちあがり、大勢の市民が連日ソウル市長広場を埋め尽くしました。

2005年より韓国の環境財団とピースボートが共同でクルーズを実施してきたことは、強まりつつある「内向き」志向に抗して、異質なものに開かれた東アジア共同体を創り上げていくための私たちの挑戦です。今年も日韓双方から約1,000名が乗船し、博多、釜山(韓国)、上海(中国)、那覇、長崎を訪れました。約50名の水先案内人（講師）にも乗船していただきました。また、保養と国際交流体験を兼ねて、被災地の福島、熊本の子どもたちも招待しました。中学生以下の乗船者は日本側が80名、韓国側が150名を数え、互いに貴重な交流の場をもつことができました。在日ブラジル人の若者も招待しました。上海から博多まで、中国外交学院とピースボートの共催で、「21世紀の海のシルクロード」をテーマに、アジア10数カ国のゲストとともに洋上会議を行いました。また、ピース&グリーンボートがめざす東アジア共同体の形成にもつながる取り組みとなりました。SEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）のメンバーと韓国の学生活動家とが語り合う企画も行い、非正規雇用が多いなど格差や貧困といった共通の課題について意見を交わしました。

ピース&グリーンボートは平和で持続可能な東アジア共同体の形成をめざして活動しています。ヨーロッパが過去の戦争の反省から戦争をしない共同体としてEU（ヨーロッパ共同体）を形成したように、私たちも過去の反省から戦争をしない、植民地支配をしない、核兵器のない共同体を東アジアに築いていきたいと思います。しかしそれは政治的な統合自体を急いで実現しようというものではなく、アジア各地で暮らす市民の日常のリアリティを摺り合わせ、その中から共通の価値観を見いだしていくところから始めたいと思います。そのためにも、今後もPEACE&GREEN BOATを私たちは出し続けます。

2016年11月
野平晋作 ピースボート共同代表



2016 PEACE&GREEN BOAT		
日　程		寄港地
7/29(金)	夜	博多(福岡)出航
7/30(土)	朝	釜山(韓国)入港
	夜	釜山(韓国)出港
7/31(日)		終日クルージング
8/1(月)	午前	上海(中国)入港
	夜	上海(中国)出港
8/2(火)		終日クルージング
8/3(水)	朝	那覇(沖縄)入港
	夜	那覇(沖縄)出港
8/4(木)		終日クルージング
8/5(金)	朝	長崎入港
	夜	長崎出港
8/6(土)	午前	博多(福岡)帰港

PEACE BOAT

多様性にあふれる世界の人と人とが直接「出会い」「学び」「行動する」場をつくる！

ピースボートの第１回クルーズが出航したのは、1983年。「みんなが主役で船を出す」を合い言葉に、好奇心と行動力いっぱいの老若男女が世界各地を訪れ、様々な国や地域に暮らす人々と直接顔の見える交流を行ってきました。ピースボートが目指すもの、それは船旅を通じて、国と国との利害関係とはちがった草の根のつながりを創り、地球市民の一人として、平和の文化を築いていくことです。そんな地球市民のネットワークづくりに必要な人との「出会いの場」や、世界が抱えるグローバルな問題を現地の人たちと共に考える「学ぶ場」、そしてそれを踏まえて実際に一人一人が「行動できる場」をピースボートは提供してきました。

環境財団

文化、コンテンツ、ライフスタイルで環境問題を身近に、アジアの夢をかなえるグリーン・ハブをめざす！

環境財団は 2002 年に設立された韓国最初の民間環境専門公益財団です。文化的なアプローチを通して環境の大切さを知らせる教育を続けてきました。日韓市民が同じ船に乗り、アジアの環境と平和など共同課題を解決していく「PEACE&GREEN BOAT」、環境と人間の共存をめざす「ソウル環境映画祭」、「環境危機時計」など様々なキャンペーンを行い、綺麗な地球をめざして努力し続けています。また、アジア生命プロジェクト「生命の井戸」や「太陽光電灯支援」、アジア環境団体支援や次世代の環境リーダー育成などの事業を通してグリーンアジアを作るのに力を入れています。さらに「子ども環境センター」を立ち上げ、子どもたちが命の大切さを学び、尊重し思いやりのある人間として成長できるよう努力して来ました。

釜山 BUSAN

放射線がんの原因が原発にあると認めた韓国の司法判決　～原告を訪ねて～

2011年3月に起きた福島での原発事故は、日本のみならず隣国の原発立地国である韓国にも衝撃を与えました。その後、韓国では原発に対する関心が高まり、反対する市民活動も行われています。このコースでは、韓国の古里原発、新古里原発がある街を訪れ、韓国の原子力開発の現状と問題を学び、原子力発電と私たちの生活との関係を考えました。

今回ガイドをしてくださったのは李真燮（イ・ジンソプ）さんです。李さんは原発近くの住民で、原発を運営する公社、韓水原（韓国水力原子力）に対して原発による健康被害について訴えを起こし、2015年に世界で初めて一部勝訴された方です。

最初に訪れたのは1978年に韓国で初めて稼働した古里原発です。この原発は運転以来130回以上もの事故、故障を起こしました。世界的に見てもここは原発が一番集中している地域です。試運転と建設中を含めて5㎞以内に10基の原子炉があり、30㎞圏内に350万人が住んでいます。私たちの目の前の海辺では、何人もの海女さんたちが貝など魚介類を獲っている光景が見られました。

私たちが次に訪問したのは、エネルギーの歴史や原子力発電の仕組みなどが展示されている古里原発エネルギーファームPR館です。この施設は新古里原発が建設された時期に造られ、施設内には原発から半径5㎞県内の住民は無料で利用できるプールやフィットネスクラブなどが併設されています。この日は土曜日のためガイドがおらず、李さんに案内してもらいました。入り口近くにある大きなボードの前に立ち「以前このボードには原発を運営する韓水原の幹部たちの顔写真が飾られていましたが、汚職事件をきっかけに写真がすべて撤去されています」とガイドの方ができないような説明をしてくださいました。

その後、李さんから自身の経験を聞く機会が設けられました。李さん自身が直腸がんの手術をされたこと、さらに奥さんの甲状腺がんの手術、母親の胃がんの手術のことなどを話されました。そして福島の事故が起き、韓水原に対して健康被害に関する訴訟を行うことを決意したと説明されました。

韓国に於いて裁判所が原発周辺住民に放射線がんの原因が原発にあることを認めたことは画期的なことです。日本でも政府が徹底した調査を進めることを求めていきたいと思います。

上海 SHANGHAI

「前事不忘、後事之師（歴史を忘れず、未来を築いていこう）」

過去、日中戦争で南京を占領した日本軍により数十万人ともいわれる人々が殺されました。このコースでは、辛くも生き延びた方の証言を聞き、事実を正面から見つめました。

上海から一路新幹線で南京にある南京大虐殺記念館に向かいました。記念館に入るとまず目につくのは、地面に残されている多くの足跡です。これは、南京大虐殺を生き延びた222人の方々の足跡で、それぞれの足跡には名前と年齢が刻まれていました。

次に、副館長の王偉民さんから「日本と中国の関係が決して良いとは言えない中での訪問は、とても重要なことだと思います。ぜひここで見たものを日本のみなさんに伝えていただきたい。そして世界の平和を促していきたい。中国や日本、韓国だけでなく、それは全世界の人々の願いです」という歓迎の挨拶を受けました。

その後、南京大虐殺の生存者である92歳の岑洪桂さんから当時の証言をうかがいました。

「1937年12月に日本軍が南京城を侵略し、中国人を殺し、家に火をつけ市内は火の海となりました。当時は父、母、兄弟は南京城の外側に住んでおり、家に火をつけられ、焼き払われました。そして、父親を含め何人か日本兵に連行されましたが、幸いにも父は解放されました。日本軍が中国人を兵士かどうか調べているところを見ました。帽子をかぶっているかどうか（兵士は帽子をかぶっているので）、引き金を打つとタコができるので手も見ていました。兵士だと疑われた人は川で銃殺されました。まだ死んでいない人は銃剣で刺殺されました。そして、殺された中国人の死体は川の中に転がり、すぐに流されました」

このような壮絶な体験を話された後、「このことを次の世代も決して忘れてはいけない。日中が永遠に友好関係を築いていけるよう願っています」という言葉を私たちに投げかけました。その後、館内で日本軍が行った残虐な行為など、多くの展示を見ました。記念館の最後には、「歴史を忘れず、未来を築いていこう」という大きな文字が掲げられていました。

日本と中国で過去の戦争を知る人々の多くは亡くなっています。今回伺った証言を次の世代に伝えていく必要性を強く感じました。

那覇 NAHA

普天間基地から見る日本『本土』の姿

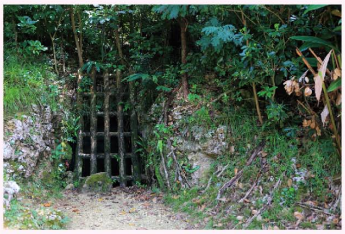
まず訪れたのは宜野湾市にある嘉数高台公園です。ここはかつて沖縄戦の激戦地で、その当時使用された陣地壕が残されています。そしてこの公園の高台を上ると、住宅密集地の真ん中に普天間基地が現れます。基地にはオスプレイが数機見え、少し視線を右にずらすと2004年に米軍ヘリが墜落した沖縄国際大学が見えます。この場で平和ガイドの方から当時の話を伺いました。

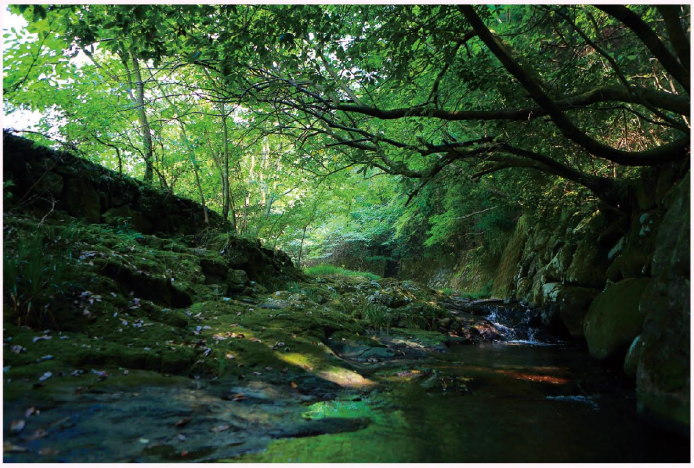
「当時は夏休みで生徒がそれほどいなかったのが幸いでしたが、教員が会議をしていた建物にぶつかったそうです。この墜落前にも、周囲の住宅に墜落する機体から羽や部品が落下し、赤ちゃんが寝ていた部屋の近くに落ちた部品もあったということです」

次に訪問したのは佐喜眞美術館です。この美術館は佐喜眞道夫さんが米軍に収用されていた土地を返還させ、その場所に建てられました。ここには平和と戦争について学ぶことのできる絵画が展示されており、屋上からは普天間基地を一望することができます。美術館では館長の佐喜眞道夫さんから、丸木夫妻が描いた「沖縄戦の図」の解説を受けました。解説の後、参加者から「米兵も美術館に来るのですか」という質問があり、これに対して佐喜眞さんは「若い米兵が数人で見に来たことがあり、この絵を見て驚いていた。まだ若い兵士は戦争に行ったことがないので、この絵を見てとても驚いたのだろう」と答えられました。

また、普天間爆音訴訟団の赤嶺和伸さんから、基地周辺の爆音などについてお話を聞きました。米軍機が上空を通ると玄関がガタガタと揺れ、ガラスが割れるような音で揺れ、犬は吠える。また、養鶏場の鶏が翌日卵を産まなかったり、生んでも殻が形成されずブヨブヨ状の卵を生むこともあるそうです。これらのことから、米軍機の爆音は人間にも影響があるのではないかと赤嶺さんは話されました。

日本全土の0.6%の沖縄に在日米軍基地の74%が集中しています。今年の4月には沖縄の女性が米兵に殺害される事件が起こりました。常に米兵による暴力、米軍機の爆音にさらされている地元の方々のお話を聞き、あらためて沖縄に基地を集中させてしまっていること自体を変えていかなくてはならないと思いました。





長崎 NAGASAKI

美しき里山は語りかける　～ダム建設に直面する川原訪問～

佐世保市に隣接する川棚町川原地区は、日本の原風景ともいえる豊かな自然に囲まれた美しい土地。石木川が流れ、初夏には数多くのホタルが訪れます。この地は今、1962年に計画されたダム建設が着工されつつあり、その豊かな自然とそこに根ざした人々の暮らしは失われようとしています。

事業主である長崎県と佐世保市は、水不足と100年に一度の洪水対策として、ダムの必要性を主張しています。一方、住民側は20年以上起きていない断水を根拠に水不足の心配はないと言います。豊かな自然と暮らしを犠牲にしてまで建設する必要性に反対し、抗議運動をおこなってきました。しかし2013年に国の事業認定を受けたため、県側は対話の必要はないとして計画を強行しようとしています。現在はダム建設に伴う道路の付け替え工事が始まろうとしており、住民は阻止行動として作業現場で座り込みをしています。

反対運動を続ける地元住民の岩下和雄さんは「住民の願いは普通の暮らしをしたいというだけだ」と訴えます。「権力を持つ行政に立ち向かうには恐怖も伴います。しかし、未来の世代にこの豊かな自然を残したいし、この辛い生活を味わわせたくない。ダム建設に反対しているのは川原に暮らしている普通の人々です。子どもの頃から住んでおり、先祖も代々この地で暮らしてきました。ふるさとは、一度沈んだら元に戻りません」

環境財団代表のチェ・ヨルさんは、「この環境を守ろうとする皆さんの姿勢に感動しました。住民が頑張れば、それだけ自然が守られます。石木ダムの建設は時代錯誤であり、白紙撤回するべきだ。韓国の国民も加わって、共に石木ダム建設反対活動をおこないたい」と述べ、日本語で「ダム建設反対!」と力強く叫びました。

ダムの建設予定地の案内後、石木川の清流の中に机と椅子を並べ、昼食を楽しみました。川原の魅力を少しでも伝えようとしてくれる住民の心遣いあふれる歓迎の中、豊かな自然を心ゆくまで満喫しました。昼食会の終わりには、川原の美しさを称える「川原のうた」を皆で歌います。「春には菜の花、夏にはホタル、秋にはコスモス。川原は四季を通して本当に美しい場所です。ここを守るために戦っている人たちを忘れないでほしい。私たちの存在を決して忘れないでください」最後に岩下すみ子さんが残したメッセージにこそ、私たちは耳を傾けるべきなのではないのでしょうか。

ダム建設に揺れる川原地区。地元住民との交流を通し、その犠牲となるものの大きさ・尊さについて考える交流となりました。

博多 HAKATA

在日コリアンのルーツを辿る旅
～語られない歴史を検証し平和な未来を考える～

かつて日本の炭鉱最盛期を支えた福岡県筑豊地区には、強制連行の歴史が刻まれています。在日コリアンのルーツを辿るべく炭鉱の町を回りました。

長年炭鉱で働く女性を取材し続けてきた井手川泰子さんの案内のもと、鞍手町石炭資料展示場を訪れました。猛烈な暑さの展示場内。「炭鉱の中はもっと暑いのです。ガス爆発、落盤など逃れようのない危険と隣り合わせに命がけで働いていた人々がいました」と井出川さん。当時の炭鉱婦や強制連行された朝鮮の方々の姿が頭をよぎります。

「風の便りでもいい。どこかで誰かが朝鮮と日本の歴史の真実を伝えて欲しい」そう語るのは強制連行を考える会代表の占部さん。当時、日本一公害のひどい場所であった小竹町へ向かいます。今では想像しがたいほど穏やかな景色の中、松岩菩提供養塔へ。塔を横目に歩くこと数分。道なき道の傍らにぽつんと小さな石が置かれています。亡くなった方の名前すらも分からない、墓石代わりに置かれた松岩に、一同言葉を失います。一時はゴルフ場建設のためにそれら全てが撤去されかけていました。その際「我々は加害者だから」と日本の地元住民、そして「せめて祖国の石で眠らせてあげたい」と同胞慰霊を望む在日コリアの同胞が協力し、この供養塔を建立したのです。「二度と過去の不幸な出来事が起こらない様に」と。供養塔の石棺の中には無記載の骨壺が多数。「もしかすると自分の祖父がこの方々にお世話になったのかもしれない」と沈痛な想いを口にする参加者も。

続いて嘉穂郡桂川町にある「徳香追慕碑」を訪れます。「朝鮮人も日本人も同じ炭鉱者として働いたんやき、死んだ後も一緒に供養しようや」と建てられた慰霊碑です。「当時15万人の朝鮮人がこの筑豊に強制連行されてきた歴史があります。この歴史を忘れないために」と、在日コリアンのペ・トンロクさんと一緒に祈りを捧げます。

「1m積み上げるのに一人の命が失われている」と言われるボタ山をぬけ、最後の訪問地、飯塚霊園内の無窮花堂へ。ここには祖国に帰れず、処分されかけていた116の遺体が納められています。約10年遺骨収集を続けてきた実行委員会の方は「歴史を学び歴史を知る。交流を深め、市民のつながりで平和を守らなければ」と言います。続いて占部さんも強く語ります。「この遺骨を故郷に返すことが我々の目的。歴史の真実を知って欲しい。在日コリアンが自由渡航で来たわけではないこと。祖国を強制的に追い出されたということを」自分の大切な母親の写真を見せてくれるペさんもまた当事者の一人です。堂内にある無名と書かれたご遺体が、まだ何も解決していないことを語ります。「私は日本人であることに心を痛めます。日本人ができる償いを考えています。過酷な環境下での強制労働。粗末な食事、着替えも荷物もない、非人間的な扱いの中で命がけで逃亡したものもいると聞きます。見つかれば見せしめの暴力。民俗受難の典型的な地、それが筑豊なのです。だからこそ、歴史の真実を伝えてほしいのです」と占部さん。

「現実を実際に目にすることは、書籍を読むことの何十倍もの学びになった」「このツアーは朝鮮学校での課外授業のようだった。天国のおじいちゃんも喜んでいると思う」と参加者。過去を学び、未来への継承にむすびつく訪問になったのではないでしょうか。

船内企画紹介

ピース＆グリーンボートでは、日韓からの多数のゲストをお招きし数多くの企画を行いました。その一部を紹介します。

ヘイトスピーチとレイシズムを乗り越えるために

金朋央、辛淑玉、香山リカ、西谷修

JUL 31, 2016

2016年5月にヘイトスピーチ解消法が成立しました。この法律の成立の背景とその効果、今後の課題などが話し合われました。

ここ数年全国でヘイトスピーチが行われきました。金朋央さんはこのヘイトスピーチを「マイノリティ差別を扇動する言動による暴力」であると指摘しました。これまでヘイトスピーチは、被害者が裁判に訴え、勝訴した後でもまた繰り返されるという、いたちごっことなっていました。しかし今回の法律成立後、カウンターデモに参加した辛淑玉さんは「これまでカウンターのいる沿道側を向いて警備していた警察官が、ヘイトスピーチを行う側を向き警備するようになった」と成立後の大きな変化を語りました。また、このヘイトスピーチが拡大する背景について西谷修さんは政府と民衆との関係について言及し、安倍政権がヘイトスピーチを煽るようなことをしているため、民衆も今の権力が求めている方向へと動いてしまうのではないかと指摘しました。

今回の法律はヘイトスピーチに限られていますが、差別解消のための包括的な取り組みが今後も求められています。

応答せよ2030　気候変動時代の新三国志

ゴ・チョルファン、イ・ソンフン、イ・ジェソク、チョ・ジンマン
チェ・ヨル、野平晋作、ジョン・グァンヨン

JUL 31, 2016

2015年に温室効果ガス排出について新たな合意がパリで結ばれました。東アジアにおいて、日韓市民が2030年までに持続可能な東アジア共同体をいかに築くか、多様な専門家が意見を交わしました。

まず環境財団のチェ・ヨル代表は、気候変動は自然災害を生み、難民が生まれ、内戦につながると、気候変動の影響の大きさを指摘しました。次に海洋専門家のゴ・チョルファンさんは、気候変動を防ぐためには日本などの技術先進国が技術支援をアジアの国々に行うなど、国家間の協力が今後重要になってくると指摘しました。また人権活動家であるイ・ソンフンさんは、気候変動により海面上昇が起こると人権を守るべきである国自体がなくなってしまうことになると人権と気候変動の関係性について警告を鳴らしました。そして広告を専門としているイ・ジェソクさんは、環境問題という難しい問題を多くの人と共有するための広告の重要性を具体例を出し説明しました。建築家のチョ・ジンマンさんは、建築家は自然エネルギーの利用を含め、環境問題に対する解決方法を今後も模索していく必要性を示しました。

若者が希望を持てる社会とは

香山リカ、今井紀明

JUL 31, 2016

若者に多様なつながりと経験を届けるNPO D×P代表の今井紀明さんと、現代人の心の病を見つめてきた精神科医の香山リカさんが、若者の生き辛さとともに、若者がこれから希望を持てる社会について語りました。

今井さんは、現在15歳以上で進学もせず就職もしていない若年無業者が増えている例を出し、これまで行政が行っていなかった10代への支援を始めたと話しました。また、今井さんはこれからの社会について「多様性を認める、自分の将来を描いていけるような社会を作っていきたい」と発言しました。香山さんは「社会が進化していくと、ただ生きるだけではいけないというような、生きる目的、かけがいのなさを求める、自己実現への脅迫のようなものが生まれ、若者は生き辛さを抱えてしまうのではないか」と話しました。そして、今後の社会の在り方について、「あらゆる個性のままで肯定できるような、社会の受け入れがあれば、一億総活躍しなければならないような話ではなく、そこから降りることも認められるような社会を目指していければよいのではないか」と話されました。

多様な性を生きる ～LGBT当事者が語る 人にやさしい社会とは～

室井舞花

JUL 31, 2016

ピースボートのスタッフである室井舞花さんが自身の体験を踏まえ、現在同性婚など世界中で話題となっている性の多様性について語りました。

室井さんは小さい頃に野球などをして

遊んでいることが多かったそうです。しかし、ある時スカートを履いていたのに男の子に間違われ、ある時は浴衣を着たら友達に笑われたそうです。このような体験から室井さんは、何をもって男女の区別ができるのかと考え、世の中で示されている男女の区別が窮屈だと感じるようになりました。その後、18歳の時にピースボートに乗船しカミングアウトした時に、もう自分自身を認めてもいいのかと思うようになったと話しました。

2013年、室井さんは同性のパートナーと結婚パーティーを挙げました。これについて室井さんは「法的には結婚できないけれど、公的な保証がない中で保証してくれるような人たちを増やすために開催しました」とその理由を話しました。そして、自身の体験を踏まえた中で、「1人の専門家よりも100人の理解のある友人を育てたい。女性は子供を産んだ方が幸せだよということに対して、本当にそれが幸せなのでしょうかと返答を試みてみることもこれから重要になってくるのだと思います」と話しました。

沖縄から考える日本の民主主義

西谷修、宮台真司、辛淑玉、木村朗、野平晋作

AUG 2, 2016

7月10日、参議院選挙沖縄選挙区で辺野古新基地建設反対とオスプレイ配備撤回を掲げた伊波洋一氏が大差で当選しました。しかし、翌日から政府は住民の抗議行動を排除し、オスプレイパット（離着陸帯）建設のための資材搬入を強行しました。

宮台真司さんは今起こっていることは戦後民主主義の帰結であると指摘し、沖縄では「9条平和主義」の下で基地が押し付けられることにより、「本土」は基地の存在を忘却できているという構造的な問題を提起されました。次に木村朗さんは今後の方向性を「今後最後の手段として独立の声が高まってくる可能性がある。沖縄のためにできることは、日本が米国の属国から抜け出すことだ」と指摘しました。また西谷修さんは「米国は州の一つ一つが政府のようなもの。グローバルなコンテクストの中で沖縄の自治ということを考えていく必要がある」と発言。最後に辛淑玉さんは、これまで沖縄の女性たちが暴力の中で生きてきて、貧しくさせられ、孤立させられてきていると指摘し、命を粗末にするあらゆる政治はだめだと訴えました。

『在日』として生きる

金朋央、辛淑玉、岩本柚香、金元明、梁美星、平山雄貴

AUG 2, 2016

在日と一言でいっても人により立場は様々です。今回、ピースボートに乗船している在日の方をゲストに、自分が在日であることを意識したきっかけを語ってもらいました。

まず岩本柚香さんは「小学校低学年の時に配られた紙に本籍が韓国と書いて

あり、すぐに裏返した。みんなと違うことが嫌だったので愛知県と書き直した」と当時の様子を話しました。また金元明さんも小さい頃の話をし、「小学校の時に選挙カーの人に手を一生懸命振っていたら、誰かから選挙権がないので意味ないよと言われたことがある」と語りました。そして、梁美星さんは22歳で初めてピースボートに乗ったときに、名前がミソンという珍しい名前なので「本名は何？」と聞かれ、その後、何人かから在日の考えを聞かせてほしいと言われ、考えざる得なくなったと話しました。

最後に、辛淑玉さんは「日本人の中で在日に興味がないという人がいるが、それはいつでも敵と認識できるという意味でもある。日本と韓国、北朝鮮が戦うようになったら、どちらとも違う在日は一番最初に殺される。だから私たちは誰よりも平和を希求しないといけない」と語りました。

今回在日の方々の体験を聞くことで、日本社会の見えづらい課題をかいま見ることになりました。

洋上会議「21世紀海のシルクロード」

中国外交学院

AUG 4, 2016

外交、国際経済、国際法に携わる人材を育成する中国外交学院とピースボートが協力し、アジア地域の協力関係のあり方について話し合う洋上会議『21世紀海のシルクロード』が開催されました。この会議には、日中韓を含むアジア全域から大学教授や政府高官を務めた有識者などの専門家約20名が参加し、海でつながるアジアの国々が領土問題やナショナリズムを乗り越え、どのように平和的な協力・共存関係を築いていけるのかについて討論しました。ピース&グリーンボートが目指す東アジア共同体の形成にもつながる取り組みとなりました。

いのちと心を大切にするスロービジネス

中村隆市

AUG 4, 2016

有機栽培や森林農法に取り組むコーヒー生産者を支援している中村隆一さんから、持続可能なスロービジネスについてお話を伺いました。

まず中村さんの人生が大きく変わるきっかけとなったのは、水俣病との出会いでした。その後、環境問題に関心を持つようになり、農薬を使う農業から有機農業へ。その後、1986年にチェルノブイリ事故が起こり、日本の有機農業も汚染されました。日本では政府が食べ物などの汚染の基準を作りましたが、中村さんの関わっている生協ではより厳しい基準値を作り、子どもたちの安全は一定保てました。しかし、政府の基準値以上のものは援助物資として途上国に回っていました。途上国に対しても何かできないかと思い生協を退職。その後、ブラジルでコーヒーの有機栽培を行っている方と出会い、現在フェアトレードでそのコーヒーを販売していると語られました。

最後にこれからの生き方について、「自分が大事だと思う仕事を見つけてほしい。事業として成り立たなければバイトをしながらでも続けることができる。幸せをもっと大事にする社会になればよい」と話されました。

民主主義って何だ?

奥田愛基、寺田ともか、オ・キョンジン、チョ・ヘミン、ムン・ユジン、中村一歩

AUG 2, 2016

昨年夏、60年安保闘争以来といわれる多くの人々が国会を取り囲みました。特に学生団体SEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）が注目を浴びました。この企画では、日韓同世代の若者に問題意識を聞き、民主主義について考えました。

まず、韓国のムン・ユジンさんは「韓国社会では経済危機があり、非正規の問題など多くの社会問題が生まれた」と活動のきっかけを語りました。またSEALDs関西メンバーの寺田ともかさんは「能力、生産性があるような人が優先される社会から、みんなが当事者として考えられ、生きていく価値があるということを保障していく社会になれば」と話しました。韓国のチョ・ヘミンさんは「社会の弱者になったとしても、自分を肯定できるようなことをしたい」と語り、市民活動家のオ・キョンジンさんは「若者の声をより出していき、活性化させていくことが必要だ」と話しました。最後にSEALDs創立メンバーの奥田愛基さんは「大人が政治だと思わないところに大切なことがある。個人的な問題を上の世代は政治として扱ってくれない。政治はそんな個人的な体験から始まらなければならない」と話しました。

『核のない世界へ』～ナガサキから～

国連で核兵器禁止条約をめぐり話し合いが行われる中、同条約への取り組みを始めるよう求める催しを長崎で開催しました。

まず、韓国の環境財団のチェ・ヨル代表の「北朝鮮の核武装、日本での憲法９条改憲の動きなどにより、再び東アジアが世界の火薬庫になる恐れがある。核のない世界のために全人類が力を合わせなければならない」という力強い挨拶から始まりました。

次に、長崎で被爆された横山照子さんはご家族を含めた過酷な被爆体験を語られました。ピースボートの川崎哲は、現在国連では核兵器禁止条約に関する話し合いが始まっているという報告が行われました。次に、被爆者歌う会「ひまわり」の方々が合唱を行いました。また、東北アジア平和連帯のイ・ブヨンさんは、日韓の市民が力を合わせる必要性を話しました。第92回ピースボートに「おりづるプロジェクト」として乗船する被爆者の深堀譲治さんは、世界中に被爆の体験を伝えていきたいと語りました。

最後に、ピースボートの吉岡達也から「世界のリーダーたちはピースボートに被爆者が乗船しているということならみんなその声を聞きたいと言います。二度と悲劇を繰り返さない。これからもみなさんと力を合わせていきたいと思います」という言葉で締めくくられました。

ナガサキ声明

次世代の平和と環境への責任として
核兵器禁止条約の即時交渉開始を求めます。

原爆投下から７１年を迎える長崎に、私たちPEACE&GREEN BOAT 2016は入港しました。韓国と日本の参加者たちは、平和や環境を考えるさまざまなプログラムを通じて、隣人どうしとして共存への努力の必要性を改めて学びました。

私たちは、原爆投下で命を奪われた、朝鮮半島からの人々を含む多数の犠牲者に哀悼の意を表します。そして、今日さまざまなご労苦のなか核廃絶と平和を訴えていらっしゃる日韓の被爆者の皆さまに心より敬意を表します。

今年、世界の注目を集めたオバマ米国大統領の史上初めての被爆地訪問が実現したのも、こうした被爆者の皆さまの長い年月にわたるご努力の成果であると確信します。

そして、このような惨劇をくり返さないために、戦争を放棄した日本の平和憲法の意義を私たちは改めて再確認します。

核兵器のない世界を実現することは、私たちの将来世代に対する責任です。広島・長崎が経験した非人道的な破滅や、世界中での核実験が人々と環境にもたらしてきた取り返しのつかない影響を考えるとき、核兵器が二度と、意図的であれ偶発的であれ、使われないことを保証することは人類社会の最優先課題の一つです。

にもかかわらず、今日、北朝鮮の核問題を含め、アジアにおいて核を含む軍備競争が進んでいるのは誠に憂慮すべき事態です。

また、福島第一原発の深刻な事故にも関わらず、日韓両国が原発政策を推進していることは、地球環境への重大な脅威でもあります。

そして、一方で原発の稼働は長崎原爆の材料物質であるプルトニウムを作り出し続けています。こうした状況が不測の破滅的事態につながる危険性を、私たちは真摯に直視しなければなりません。

こうした中、今世界では、たいへん励まされる動きがあります。それは、ジュネーブの国連欧州本部で開かれてきた国連作業部会において、大多数の国々が核兵器禁止条約を作ることを支持する声を上げているということです。私たちはこの作業部会が、核兵器禁止条約の交渉開始を明確に支持する勧告を採択し、国連総会に送ることを期待しています。

私たちは世界中のすべての国に対して、核兵器禁止条約の交渉に積極的に参加することを求めます。とくに日本と韓国の政府の責任は重大です。これらの政府は核抑止論という恐怖の論理に依拠した政策をとり、核兵器禁止条約には消極的な態度をとってきました。今この政策を大きく転換し、核兵器禁止条約交渉に参加すべきです。核兵器禁止条約の交渉が進むことは、北東アジア非核地帯化の動きを前進させることにもつながります。

長崎を最後の被爆地にしなければなりません。核兵器は決して許されない非人道兵器であるということを国際的な法規範として確立し、人類の歴史の新たなページを開くことに対して、私たちは努力を惜しみません。

２０１６年８月５日
長崎にて
PEACE&GREEN BOAT 2016
環境財団
ピースボート

写真で綴る 日韓クルーズ Photo

乾杯に合わせて出航式!!

ピース＆グリーンボートフレンドシップ集合写真

鳳仙花で爪に色を染めよう

おりづるを折ろう

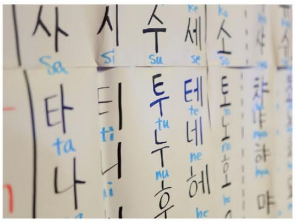
洋上国際会議

かんたんハングル・日本語講座

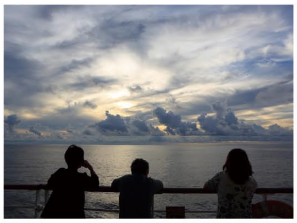
夢と希望があふれる！

バブル＆マジックショー

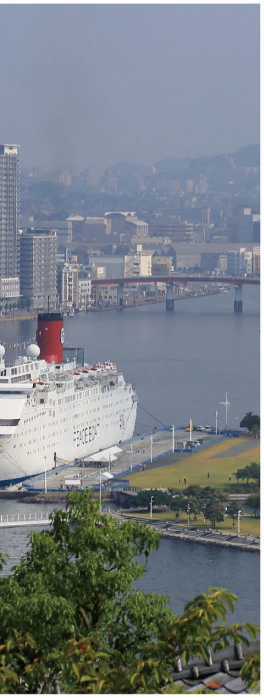
地球大学



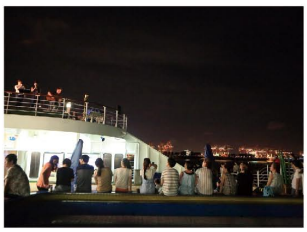
子どもたちのなつまつり



沖縄寄港記念 八重山伝統芸能パフォーマンス



ピース＆グリーンボート フレンドシップコンサート



子どもたちのブリッジツアー

日韓子ども交流 エコマップ作り

船内家族をつくろう！

ハングルで習字を書こう

子どもたちの国際交流

今回のクルーズにはプロジェクトを通じて、福島や熊本、韓国、ブラジルなど多くの子どもたちが乗船し、大交流が行われました。

今も原発災害の影響によりさまざまな困難を強いられている福島から、NPO「南相馬こどものつばさ」を通じて南相馬市の中高生11名とアシスタント1名が乗船しました。また、今年4月の地震の被害を受け、厳しい生活が続く熊本から、地元の教育委員会にご協力いただき、南阿蘇西小学校から7名、南阿蘇中学校から18名の計25名が参加しました。そしてブラジル領事館との共同プロジェクトで日系ブラジル人の2名の子どもたちも乗船しました。一般の参加者を含めて日本から約80名の中学生以下の子どもたちが乗船しました。韓国からも約150名ほどの子どもたちが乗船し、交流しました。

船内では、韓国の子どもたちから韓国の遊びを教えてもらったり、韓国の参加者に向けて南相馬や南阿蘇のことを紹介したり、お互いの語学を学んだりしました。そして、訪れた寄港地でも、文化・食事・歴史・環境・戦争など、様々なテーマについて学ぶ旅となりました。

韓国子ども洋上学校

これからの未来を担う子どもたちが「一つの船」に乗り、東北アジアの環境、歴史、文化に触れあい、船内でも様々な分野の専門家からお話を聞きながら、将来の夢膨らむ船旅を毎年行っています。

在日ブラジルユースプロジェクト

このプロジェクトは、2014年からピースボートと在日ブラジル総領事館が協力して行っているもので、日本に住む日系ブラジル人の高校生を対象にエッセイコンテストを実施し、その優秀者を船旅に招待するという取り組みです。

福島子ども プロジェクト

ピースボートでは、保養と国際交流の体験を通して、子どもたちに夢と健康を届けたいとの思いから、2011年の震災直後に「福島子どもプロジェクト」を立ち上げ、一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンターとともに実施しています。

熊本子ども プロジェクト2016・夏

2016年4月の熊本地震以降、様々なストレスを抱える熊本・南阿蘇の子どもたちに、飛びっきりの夏休みの思い出をプレゼントしようと、南阿蘇の教育委員会協力のもと今回初めて実施しました。

INDEX

交流プログラム一覧

【釜山】
D:『韓国民主化運動』と『平和』を考える
E:古里原発を通して考える命の『安全』

【上海】
A:都心の生態公園、崇明島へ
B:韓国独立運動の足跡をたどる
C:検証『南京大虐殺』
D:中国で友だちを作ろう!上海のお宅訪問＆交流
E:戦争の『被害者』について考える～南京慰安婦資料館で学ぶ～

【那覇】
A:美しい沖縄の環境問題を考える
B:市民がとめる辺野古の米軍基地建設
C:普天間基地から見る日本『本土』の姿
D:南部戦跡めぐり～『捨て石』作戦としての沖縄戦～
E:沖縄のいまむかし～沖縄戦・基地・文化のまち～

【長崎】
A:日韓交流『オルレ』嬉野コースと温泉体験
B:日韓で考える『平和』への道
C:雲仙地獄めぐりと温泉エネルギー体験
D:遠藤周作が愛したキリシタンの母郷をめぐる
E:美しき里山は語りかける～ダム建設に直面する川原訪問
F:軍艦島と強制連行の歴史をたどる

【博多】
A:唐津で日韓交流　海水浴＆『オルレ』!
B:『脱原発』と『未来のエネルギー』を考える
E:在日コリアンのルーツを辿る旅
～語られない歴史を検証し平和な未来を考える～

水先案内人一覧

荒井かおり／【歌手、タレント】
今井紀明／【認定NPO法人DXP（ディーピー）理事長】
オ・キョンジン／【韓国女性団体連合活動家】
奥田愛基／【SELADs創立メンバー、一般社団法人ReDEMOS代表理事】
香山リカ／【精神科医】
木村朗／【鹿児島大学教授】
金朋央／【NPO法人コリアNGOセンター東京事務局長】
沢知恵／【歌手、コモエスタ代表】
辛淑玉／【人材育成コンサルタント、のりこえねっと共同代表】
平竜徒／【ギタリスト】
チョ・ヘミン／【学生、活動家】
寺田ともか／【SELADsKANSAIメンバー】
中原一歩／【ノンフィクション作家】
中村隆市／【（株）ウインドファーム代表、（有）ゆっくり党代表
環境＝文化NGOナマケモノ具楽部世話人、東北あじたの森代表】
西谷修／【立教大学教授】
西谷悦子／【パタゴニア日本支社社会＆環境部門環境プログラムコーディネーター】
宮台真司／【社会学者、首都大学東京教授】
村上木綿子／【歌手】
ムン・ユジン／【福祉国家青年ネットワーク代表】

環境財団ゲスト一覧

イ・グァンホ／【延生大学校哲学科名誉教授】
イ・ソンジョン／【ウンドク文化院副院長】
イ・ヒョジェ／【韓服デザイナー】
イ・ハンチョル／【歌手】
イ・ジェソク／【イ・ジェソク広告研究所代表】
イ・ソンフン／【韓国人権財団常任理事】
イ・ブヨン／【日韓協定再交渉国民行動・東北アジア平和連帯常任代表理事長】
ウ・スンミン／【歌手】
ウン・ヒギョン／【作家】
キム・ウイル／【写真作家】
キム・ウンギョン／【ワイヤーアーティスト】
キム・ウンソン／【彫刻家】
キム・ブギョン／【ブーズ代表】
キム・ボンジュン／【彫刻家】
キム・ヨンハ／【作家】
クァク・ドンホ／【コットルマジシャン】
ゴ・チョルファン／【ソウル大学地球環境科学部名誉教授】
ジュ・ヨンウク／【ベストラベル代表】
ジョ・ジンマン／【建築家、ジョ・ジンマンアーキテクト代表】
ソ・ミョンスク／【チェジュオルレ理事長】
タクソ／【アートディレクター】
チョ・ヨル／【環境財団代表】

参加者の声

ヒョン チョンホ

私は今年の2月に会社を辞め、個人で今世界を旅行しています。その途中で友人からこのクルーズを教えてもらいました。私は今後、日中韓の文化コンテンツに関するプロジェクトを行いたいと考えており、多くの人が乗るこのクルーズはその夢を実現するための環境があると考え、参加しました。

今回印象に残ったのは、中国での家庭訪問のツアーでした。65歳のおじいさんの家で、3代一緒に住んでいました。部屋の中を案内してもらう中で、一緒に笑うなどして家族のような交流となりました。日中韓の間には政治の問題などがありますが、このような経験から青年にもできることがあるという希望を持てるようになりました。

キム ヒョンテ

今回一番印象に残ったのは、戦争中に朝鮮半島から福岡に強制連行された炭鉱労働者を供養するための「松岩菩提の塔」を訪問するツアーでした。知らない歴史について運動している日本人がいることに驚きました。また、日韓の市民がその歴史の現場で追悼すれば、日韓が和解できるのではと思いました。そして、胸が詰まり、感情を表現することが難しいことを実感する経験でした。

韓国では強制連行についてはテレビで学んだことがありましたが、自分の目で見たことはなく、今回感じたことは特別なものでした。そして、このツアーでは日本の参加者の方と一緒だったので、このような感動が2倍になったのだと思います。

水上 空

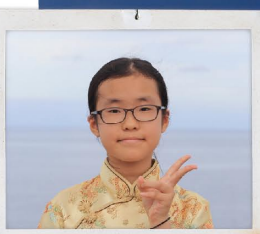
今回、学校の先生の推薦で船に乗りました。海外は今回が初めてです。船に実際乗ってみて、船内にエレベーターがあったのには驚きました。

船内で印象的だったのは、バブルドラゴンさんのシャボン玉がとても面白かったです。日本語は喋れないけれど、みんなとお互い手を振ったり挨拶して、友達がたくさんできました。また、ダンスをしたり、琴を演奏したり、イベントで司会役もしました。また、寄港地では沖縄の水族館が面白かったです。船を降りたら友達にすごくよかったよと言いたいと思っています。

お父さんが水先案内人としてピースボートで世界一周をしたことがあり、今回お父さんから誘われて乗りました。世界に関心があり、色んなところを見たいと思いました。今回が初めての海外です。

英語が少ししか話せないのですが、韓国の人が優しく、英語が下手でも聞き取ってくれ、友達がたくさんできました。また、船内で船内新聞に載せないでフットサルを企画したら、口コミだけで友達が集まり、すごく感動しました。

ツアーでは沖縄の南部戦跡に行き、アブチラガマやひめゆりの塔、戦争で亡くなった人の名前の書いた碑などを見ました。戦争はみんなダメだと言うけれど、何が悪いのか具体的にはみんな知らない。人を殺すことが一番当たり前だと思うことが一番怖いと思いました。



チャン ミニ

鎌田 康成

ピースボートの第90回クルーズに乗っていました。第90回クルーズがとても楽しかったので、多くの人に自分と同じような経験をしてもらいたいと思い、今回船内運営スタッフとして乗船しました。

英語も韓国語もできないのですが、韓国からの参加者とフィーリングが合う人など、多くの参加者と仲良くなりました。仕事の時もオフの時も楽しんでいます。スタッフも参加者の企画にも入って、仲良くなっていく、いい感じのフランクさがあると思います。みんな知り合いたいと思うし、喋りかけるし。

舞台の上でみんなで沖縄のカチャーシーを踊ったこともあります。ピースボートに乗る方はみんなパワフル。楽しむところはお客さんと一緒に楽しみたいと思っています。

西岡 由香

今回一番感動したのが、車椅子を利用している韓国のお母さんと、その家のお嫁さん2人との出会いでした。お母さんは80歳で、小さい頃に日本の植民地化で日本語を覚えさせられており、少し知っている日本語を発音してくれました。それに対して、私から過去の日本の植民地化について「すみませんでした」と言うと、肩を撫でてくれました。船内で似顔絵を描いたり、デッキなどで交流が続くうちに、日本の着物を着てみようという話になりました。偶然、私の同部屋だった方が着付けの先生だったので、彼女に頼んでお母さんに着物を着てもらいました。そうしたら、お母さんがとても喜んでくれ、それを見てたら自然と涙が溢れてきました。

第９回　ピースボート日韓クルーズ　報告書
発行：国際ＮＧＯピースボート
発行日：２０１６年１２月
編集：野平晋作、許美善
執筆：越智信一朗、岡田哲、片岡和志
写真：片岡和志

この刊行物に関するお問い合わせは下記までお願いします。
〒１６９－００７５
東京都新宿区高田馬場３－１３－１－Ｂ１
ＴＥＬ：０３－３３６３－７５６１
ＦＡＸ：０３－３３６３－７５６２
Ｅ-ＭＡＩＬ：info@peaceboat.gr.jp